

氏名	山口 善成
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博乙第 2778 号
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	History in Transition: The Idea of Temporality in Early American History Writing（歴史と変化： 初期アメリカ歴史記述における時の概念）

主査	筑波大学 教授	文学博士	鷺津 浩子
副査	筑波大学 教授	博士（文学）	宮本 陽一郎
副査	筑波大学 教授	Ph.D.	竹谷 悦子
副査	国際基督教大学 特任教授	Ph.D.	大西 直樹
副査	東京女子大学 教授	博士（学術）	本合 陽

## 論文の要旨

本論文は独立期から 19 世紀のアメリカにおける歴史記述を題材に、ちょうど同時期に西洋の知的文化に起こったとされる「時」や「歴史」の概念の変化と照らし合わせて、その特徴と意義を明らかにする試みである。ミシェル・フーコー、アーサー・O・ラブジョイ、その他多くの知識史家たちは、18 世紀末から 19 世紀にかけて、西洋に新しい「時」ないし「歴史」の概念が生まれたと指摘している。天地創造以来、安定し根本的に変わらないものとされた世界は、絶えず変化し続ける「個」や「内面」に対する関心や自然科学における地質学の発展をきっかけに、徐々に時間化され、動的に捉えられるようになったという。本論文は、これと同じ時期に国家の基盤を整えようとしていたアメリカの歴史記述事業においてこそ、近代歴史学の特徴や問題点がより顕著に表れているという仮説をもとに、静から動へ、秩序から変化へといった世界観の移行が当時アメリカで書かれた歴史書にいかなるかたちで組み込まれ、どのような歴史記述の方法論を生み出したかを検証する。

論文は大きく 3 つのパートから成る。

### パート I：史料の収集と体系化（第 1 章から第 3 章）

独立期から 19 世紀初頭の歴史家たちにとって、新しい国家アメリカの歴史は新しいスタイルで書かれなければならなかった。それは従前アメリカの歴史記述を支配してきた伝統的な予型論の歴史観から

の脱却を意味する。そこで新しい歴史家たちが依って立つことになるのが、個々の具体的な史料だった。1791年創設のマサチューセッツ歴史協会を皮切りに、史料の収集と保存を目的とする歴史協会が各地に出現すると、一次資料を年代順あるいは主題別に収録したドキュメンタリー・ヒストリーのジャンルが確立される。史料はその存在意義が常に明白 (evident) なものから、新たな理論化の可能性をひめた evidence になったのである。

しかし、集められた史料の山からいかに統一的な物語を帰納してゆくかという問題は、以降の歴史家たちを常に悩ませることになる。それは例えば、科学的客観性と物語的想像力との衝突として姿を現す。ジャレド・スパークスやヘンリー・アダムズは歴史を厳密な科学とみなし、そこに歴史家自身の予断や固定観念が介入することを禁じた。もちろん史料はそのままでは自動的に歴史を語り出すことはなく、歴史が一つの物語として成立するためには歴史家自身に起因する何らかの準拠枠に依らざるをえない。

#### パート II : アメリカ史の自然 (第4章、第5章)

初期アメリカの歴史記述に共通するもう一つの特徴は、歴史をアメリカの自然や土地に結びつけて語るスタイルである。そもそも当時の歴史家たちにとって、国家の歴史 (ナショナル・ヒストリー) と自然誌 (ナチュラル・ヒストリー) は不可分だった。例えば、ジェレミー・ベルナップの『ニューハンプシャー史』全3巻は、その第3巻をまるごとニューハンプシャー州内の自然誌記述にあてている。

さらに19世紀初頭から半ばにかけては、とりわけ教育の分野において歴史と地理の融合がさかんに取り組まれた。例えばエマ・ウィラードは、地図と歴史を融合する一連の試みの中で、「諸国家の歴史図」と名づけられた世界史曼荼羅図、またそれをもとに「時の神殿」という図像を発明した。

これらの「歴史の地図」は歴史と地理の融合に関わる一つの大きな問題を浮き彫りにしている。すなわち、「歴史の終わり」の問題である。ウィラードをはじめとする、当時の歴史と地理の融合や歴史の視覚化の試みは、歴史が完成しうるものであることを暗示し、典型的には民主主義国家アメリカの登場をもって歴史の到達点とする歴史観を反映していた。

#### パート III : フランシス・パークマン (第6章から第8章)

フランシス・パークマンの植民地史もまたアメリカの自然や土地に密接な関係を有していた。彼は歴史家であると同時にマップメイカーでもあり、自ら作成した地図を歴史書に組み込んでいる。地図を見渡すような巨視的な観点と、土地に根ざしたローカルな逸話を描く微視的な観点とを交互に繰り返すのが彼の歴史記述の特徴である。

ただし、パークマンの歴史を特色づけるアメリカの土地や自然は、それ以前の伝統的な自然観とは別種のものである。彼の歴史は明らかに地質学的な想像力によってデザインされ、歴史的变化は地質学的な層の堆積のイメージで説明されている。地質学的な時間が提示する垂直に根ざした時間感覚は、とりわけアメリカにとって重要な意味を持っていた。パークマンが読者の足下に豊かな歴史の層があることを示す時、それは国家の過去が水平方向に旧大陸に結びつけられるのではなく、垂直方向にアメリカの土地の深部へと延びてゆくものであることを暗に示唆している。

もちろん垂直方向に延びる歴史の深部にあるのは、先住民インディアン放逐の悲劇である。パークマンの歴史は、白人読者に過去の負の歴史に対して反省を促すものではない。地質学的な深い時間感覚は、過去と現在を上下の関係として捉え、現在の優位性を正当化した。パークマンはインディアンを決して変わらうとしない「岩」と形容しているが、彼にとってインディアンの岩の「層」はもう終わってしま

ったもの、根本的には無用のものだった。こうして、過去を掘り起こしつつ同時にそれを忘却する二重の操作により、本来悲劇であったはずのインディアン殲滅の過去は国民国家アメリカの歴史の一部として驚くほどスムーズに吸収されることになるのである。

パークマンの歴史記述において、地質学的な「層」の歴史観は結局のところ、層の一番上に立つ「現在」の優位性を揺るがさない。その意味では、彼の歴史記述も完全に時間化された歴史記述だったとは言いきれないだろう。ちょうど人間だけを変化から免れた特権的な存在としていた地質学の歴史観が、やがてそこから派生した進化論的世界観によって取って代わられたように、歴史記述の時間化はパークマンの次の世代にさらに持ち越されることになる。

## 審 査 の 要 旨

本論文は、初期アメリカの歴史記述において、temporality と historicity がどのように作用したかという大きな問題を、建国当時から 19 世紀までを視野に入れて論じたものである。著者は、アーサー・O・ラヴジョイ、ミシェル・フーコーからヘイドン・ホワイトまでを援用し、この時期に“the historical or temporal nature of history”が意識されるようになったこと、そして独立したばかりのアメリカでは自国の歴史を必要としたことを指摘する。けれども、チャールズ・ダーウィンが「進化論」という temporality を解釈する枠組みを作り出す以前の「歴史」家たちにとっては、この作業は容易なことではなかった。著者は、ヘンリー・アダムスのような知られた歴史家だけではなく、エマ・ウィラードやジェレミー・ベルナップのようなあまり論じられていない歴史家を取りあげ、こういった歴史家たちの記述がたどった変遷を、膨大な資料を駆使して読み解いていく。そして、フランシス・パークマンをこの時代の歴史家を代表する人物として取りあげ、その方法論に地質学が与えた影響を論じている。従来のアメリカ文学研究の盲点ともいえる分野に光を当て、文学だけでなくアメリカそのものを論じる視点を提供したことは、今後の文学研究の動向にも大きく寄与することだろう。

とはいえ、本論文に欠点がないわけではない。アメリカ思想史に欠かせないラルフ・ウォルド・エマソンが結論部で触れられているだけであること、ダーウィニズムの到来は歴史記述にどんな変化をもたらしたのか十全に論じられていないことなどである。けれども、これらの問題は本論文に組み入れるには大きすぎる問題であり、今後の研究成果に期待したい。

本論文は最高水準の学術英語で書かれており、審査員のひとりから「アメリカでの出版と日本語に翻訳した本の出版を目指すべき」というコメントがあったことを付記しておきたい。

平成 28 年 1 月 23 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第 10 条（2）に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。